ぬのびきえんたいぐん

布引掩体群

所在地：東近江市尻無町・下二俣町・柴原南町・芝原町

布引掩体群航空写真（赤い丸は掩体の位置）

遺跡の概要

東近江市の中央に位置する沖野ヶ原と呼ばれる一帯に、昭和20年の敗戦まで、陸軍八日市飛行場がありました。飛行場は、大正4年に民間飛行場として開設、大正11年に全国で3番目の陸軍飛行場として航空第三大隊が配備された、歴史ある飛行場でした。

布引掩体群は、昭和19年から20年の戦争末期に、本土決戦に備えて作られたもので、現在滋賀県内で唯一その形を留めています。なお掩体（えんたい）とは、飛行機などを避難させて隠す目的や、爆風から保護する目的で作られた施設です。

飛行機用掩体（7 号掩体）

布引掩体群の調査

布引掩体群は、平成 12 年に「皇子山を守る会」が現地調査を行い、『滋賀県・八日市飛行場に関する戦争遺跡調査報告』が刊行されたことによって、その分布が明らかとなりました。

平成 18 年に埋蔵文化財包蔵地「布引掩体群」となり、平成 19 年から平成 21 年に、地元の協力により東近江市教育委員会が約４万４千平方メートルの測量調査を行い、掩体 17 基、誘導路、小型掩体３基以上、土塁状施設１箇所、個人用防空壕 10 基などが見出されました。

さらに、布引掩体群の建築に係わった小杉弘一さん（大正 15 年生まれ）の証言によって、掩体の構造には、鉄筋コンクリート造ドーム型、木造アーチ梁ドーム型、木造格納庫型、屋根なしの開放型の 4 種類があり、製作途中で終戦を迎えたものがあることがわかりました。

布引掩体群の構造

布引掩体群は、八日市飛行場の南に位置する布引丘陵の北側裾部、長さ約２キロメートルの間に、１号掩体から 17 号掩体までが並んで作られています。その分布は、東側・中央・西側の大きく３つに分かれています。飛行場南縁部の蛇砂川からは、飛行場から掩体までの誘導路が柴原南町のルートと下二俣町のルートの２本あり、ちょうど東側の掩体群と西側の掩体群につながる位置にあったと推定されています。

掩体群周辺の丘陵中には、高射砲台や監視所、木造掩体を作るための作業場などがあったとされますが、位置の確定には至っていません。

なお、飛行場の東側、現在の八日市インター付近の松林の中にも、誘導路がつくられているのが航空写真でみられ、ここにも掩体があったと見られますが、現在は残っていません。

昭和 24 年（1949）航空写真

コンクリート基礎が残る掩体（3 号掩体）

コンクリート基礎が残る掩体（5 号掩体）

コンクリートの屋根が残る掩体（4 号掩体）

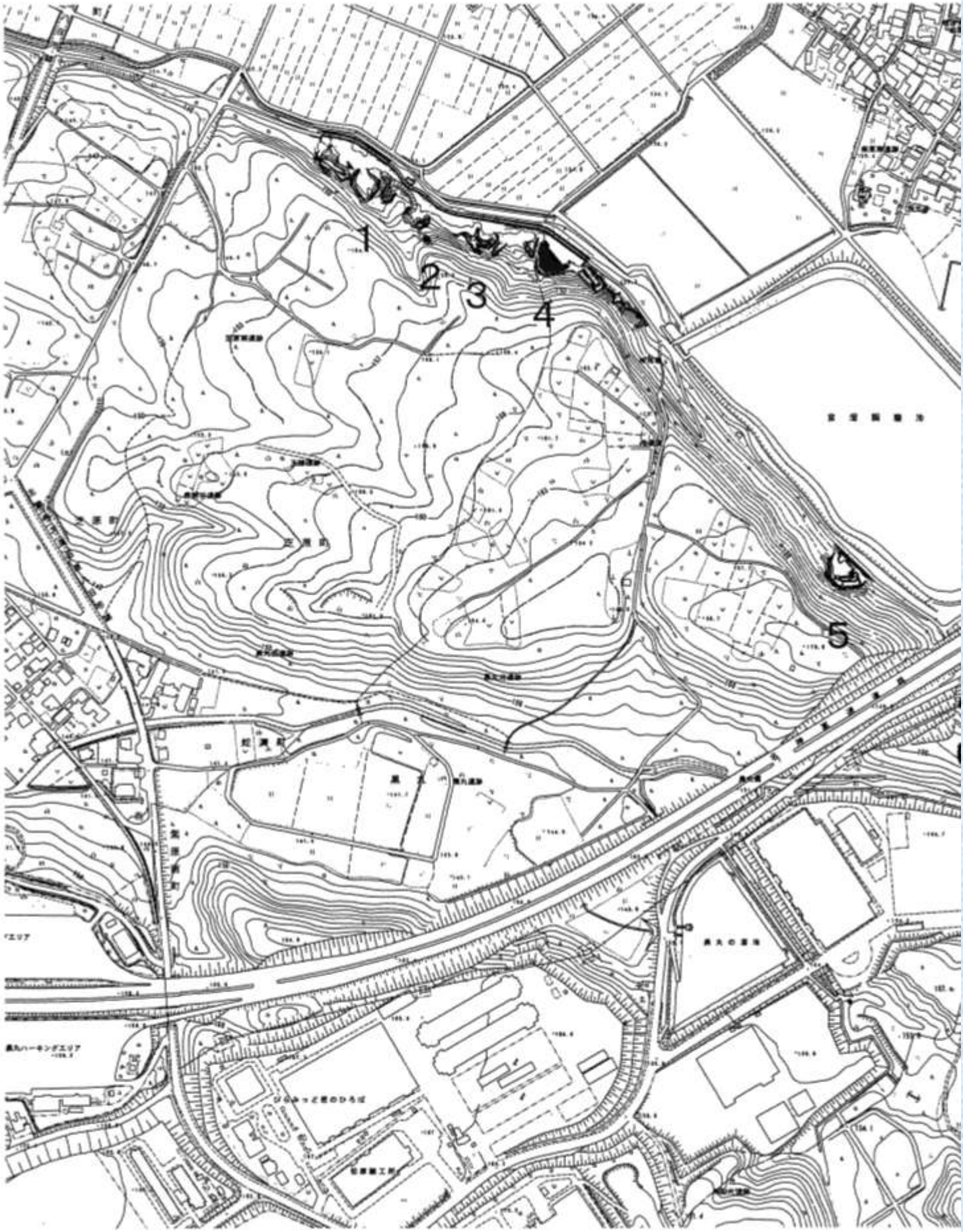
コンクリートの屋根が残る掩体の後部（4 号掩体）

土製掩体の痕跡（16 号掩体）

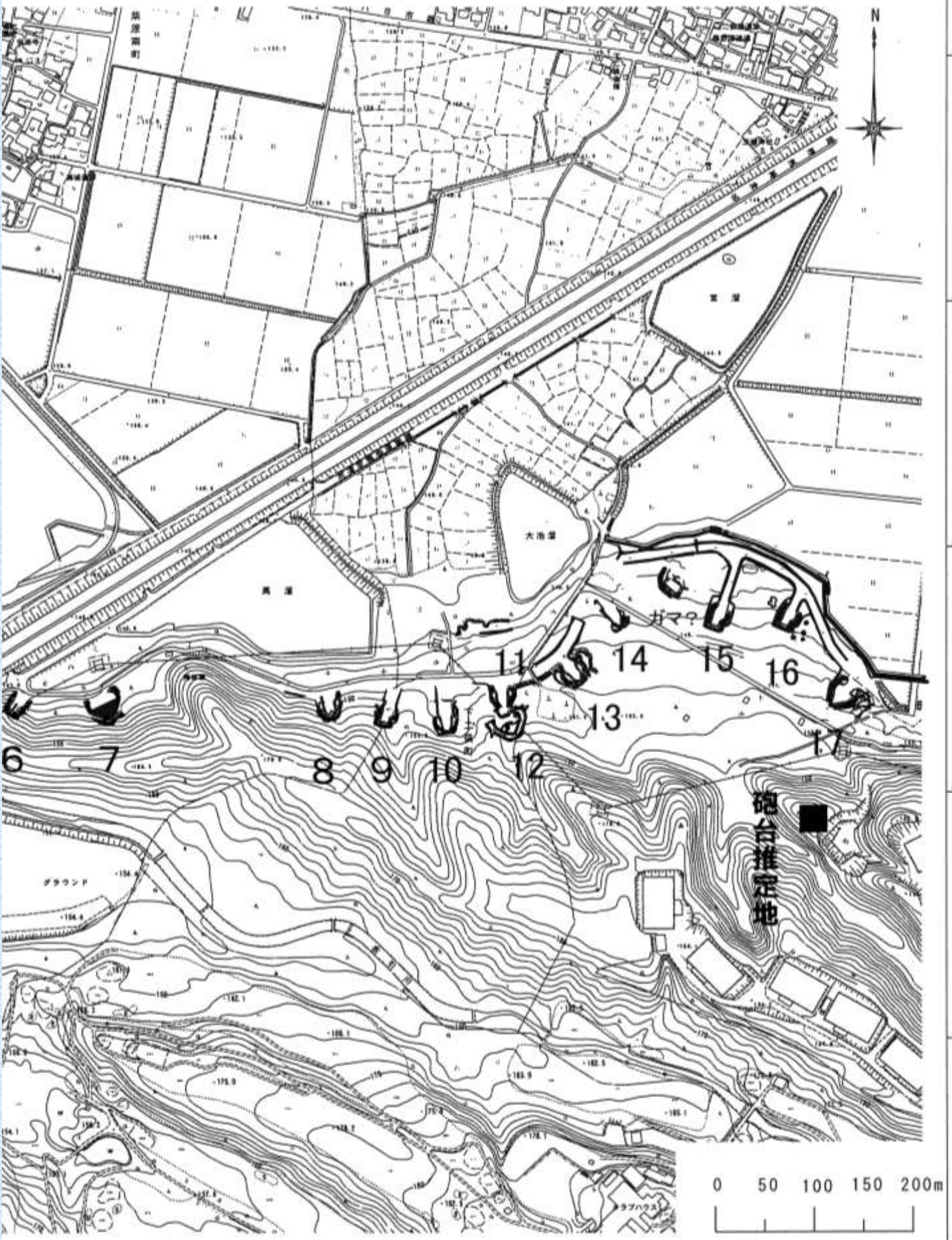
土製掩体の後部（16 号掩体）

コンクリートの基礎が残る掩体（11 号掩体）

誘導路の痕跡（尻無町）


1
2
3
4
5
6

布引掩体群測量図



掩体の大きさ一覧

No	構造	基礎	立地	平面形	最大幅(m)	奥行き(m)	間口(m)	最奥部幅(m)	備考	附帯施設
1	土製	なし	斜面掘り込み	馬蹄形	30.946	23.433	18.240	－	最奥部は掘削途中、未完成か。	西側に土塁状施設、東側に塹壕状の掘り込みあり。
2	土製	なし	斜面掘り込み	凸形	26.057	14.513（現況）	17.057	－	最奥部は掘削途中、未完成か。	－
3	土製	あり	平地	バチ形	25.164	15.125	15.849	13.084	コンクリート製基礎を前面のみ確認。未完成か。	西側に土塁状施設、東側に塹壕状の掘り込みあり。
4	コンクリート製	あり	斜面掘り込み	バチ形	36.195	22.075	24.568	7.910	コンクリート製屋根あり。屋根内には土壇状の土あり。未完成か。	東側に塹壕状の掘り込みあり。東側の斜面に3箇所のタコツボ状掘り込みあり。西側斜面よりの流水防止のためと考えられる斜面に平行方向の溝有り。
5	土製	あり	斜面掘り込み	バチ形	25.277	19.369	15.581	8.284（推定幅）	単独で存在する。	－
6	土製	なし	斜面掘り込み	凸形	20.078	17.854	13.564	8.134	東側壁面を屈曲させ、奥を狭める。最奥部中央に幅約1.5m、延長約7.6mの溝状遺構有り。	－
7	コンクリート製	あり	斜面掘り込み	バチ形	36.987	22.092	25.779	8.554	コンクリート製屋根あり。屋根内部に土壇状の土あり。未完成か。	－
8	土製	あり	斜面掘り込み	バチ形	23.691	21.223	17.204	6.930（現状）	コンクリート製基礎を東側のみ確認。	－
9	土製	なし	斜面掘り込み	凸形	15.182	37.130（12.747）	13.241	8.076	－	誘導路20m残存。
10	土製	あり	斜面掘り込み	バチ形	22.078	45.518（14.496）	15.592	4.563	コンクリート製基礎を東側のみ確認。	誘導路30m残存。
11	土製	あり	斜面掘り込み	バチ形	23.28	15.288	15.629	5.648（基礎端部幅）	コンクリート製基礎が完存。	南側の12号掩体と接続する。
12	土製	なし	斜面掘り込み	バチ形	43.263	25.110	20.967	8.996	内部に土塊が残存する。	11号掩体と接続しており12号掩体の附帯施設として構築された可能性がある。
13	土製	なし	斜面掘り込み	バチ形	30.958	25.826	9.590	3.953	斜面を掘り込む形で構築される。	短い誘導路残存。
14	土製	なし	斜面掘り込み	凸形	18.479	21.613	12.896	2.422	－	誘導路が後世に削平。
15	土製	なし	平地	凸形	24.826	21.606	9.908	6.438	東側土塁壁を屈曲させ、最奥部を狭める。	誘導路からの引き込み路あり。西・北側にL字に取りつく塹壕状の土塁あり。
16	土製	なし	平地	凸形	25.595	20.803	11.008	7.593	東側土塁壁を屈曲させ、最奥部を狭める。	誘導路から引き込み路あり。西側に1箇所、東側に3箇所のタコツボ状掘り込みあり。
17	土製	なし	平地	馬蹄形	32.777	29.522	9.639	－	平面が馬蹄形で、間口内側を張り出させて狭める。最大幅は中央部分で、土塁の残存高は約1.5mである。誘導路に接して開口する。	－

布引掩体群の中でも、コンクリート製の掩体が人目を惹きます。しかし、屋根を作る際の型である土盛りが内部に残っていることから、未完成の可能性があります。またコンクリートよりも、木製や土・樹木で覆う無蓋掩体の方が暑くなく、爆破を防ぐためには都合がいいこともあったとされます。

布引掩体群へは、2 式複座戦闘機「屠龍（とりゅう）」（全長 11 メートル）を運んだという証言があることから、飛行機が運ばれたことは間違いないようです。戦争末期には教育用の 99 式双発軽爆撃機、100 式司令官偵察機や 93 式中間練習機などが飛行場に残っており、大型のものは含まれないことから、本土決戦の拠点として、重爆撃機のような大型の飛行機が来る可能性があったのかもしれません。

４号掩体実測図（図下が北）

コンクリート製掩体で、バチ型は飛行機の形に合わせたものと考えられます。背面の丘陵裾の傾斜面をカットして配置します。内部には土盛りが残ります。

コンクリート掩体の右側は、塹壕状（ざんごうじょう）の堀込みです。人やガソリン、自動車などの物を避難させたり、隠したりしていたと考えられます。

八日市飛行場の痕跡

終戦により八日市飛行場は閉鎖されました。その後、水田へ開拓や、住宅・工場が建設され、現在はその姿を見ることはできませんが、土地区画に痕跡が残る他、陸軍の標識を見つけることができます。

また飛行場の関連施設として、「冲原神社」が今も地元の方々によって受け継がれています。冲原神社は陸軍飛行場となった後、大正 14 年に衛戍（えいじゅ）神社として創始され、昭和 2 年に改名されました。境内には、のちに廃棄されているのが発見された軍施設の門柱が移築されています。

布引掩体群の他に、遺跡（埋蔵文化財包蔵地）となっているのが「平林射撃演習場」（平林町）で、近年新たに見出された遺跡です。

このような戦争遺跡が物的証拠として残ることで、その歴史を実際のものとして伝えてくれます。

陸軍の所有を示す土地境界石（大凧会館）

冲原神社（東沖野町）

連隊本部の門柱（冲原神社内へ移築されたもの）

平林射撃演習場の跡（平成 27 年）

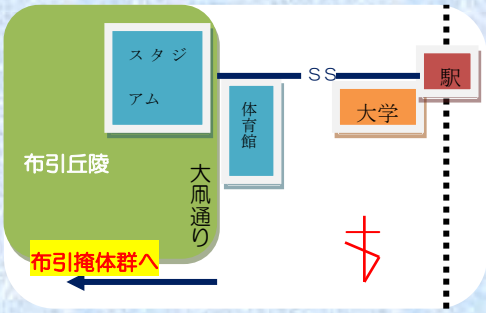
平林射撃演習場に残る遺構

八日市飛行場年表

大正３（1914）	10.22荻田常三郎・大橋助手が沖野ヶ原で飛行
大正３（1914）	11.3「沖野原飛行後援会」「翦風飛行学校設立期成同盟会」発足 （町長 横畑耕夫）
大正４（1915）	4.7八日市町 八日市飛行場造成決議　4.19地鎮祭 6「八日市飛行場期成同盟会」設立　造成完成
大正５（1916） 21ヶ条要求	第二翦風号修理 1.31アメリカ人・ナイルス最高高度記録樹立 2.5民間飛行家中沢家康が飛行 5中国革命軍兵士が飛行訓練　熊木九兵衛が軍事顧問として 中国革命軍に雇用　第二翦風号山東省に渡る 10.17民間飛行家野島銀蔵が飛行
大正６（1917）	2.6アメリカ人・チャンピオン、5.10アート・スミス飛行 11沖野ヶ原飛行場が陸軍特別大演習の不時着陸場となる
大正７（1918）	5陸軍航空第三大隊 編成発令
大正９（1920）	6.1飛行場拡張地鎮祭
大正10（1921）	3大隊本部以下建物竣工　航空第三大隊が移駐 12京都憲兵分隊八日市憲兵分遣所開設（川合寺）
大正11（1922）	1.11**航空第三大隊**（第十六師団隷下）　開隊式 4飛行場ほか関連施設竣工4.25工兵曹長森作蔵墜落死 7.28**飛行第三大隊**に改称
大正12（1923） 9.1関東大震災	1.10〈第二中隊〉編成
大正13（1924）	1〈第三中隊〉編成
大正14（1925）	5.1**飛行第三聯隊**に改称〈戦闘機二個中隊、偵察機一個中隊〉
昭和２（1927）	10.1〈戦闘機三個中隊〉編成
昭和５（1930）	10新八日市-飛行場駅開業
昭和６（1931）	9満州事変
昭和７（1932）	5.5京都・大阪の防空演習に参加 6.10満州派遣 6.11上海戦線より帰郷
昭和８（1933） 国際連盟脱退	飛行第二大隊〈戦闘機二個中隊〉編成　奉天へ 〈偵察機三個中隊〉に軍備改編 9.17･18県下一斉大防空演習
昭和９（1934）	1筏川覆蓋工事　7.26～28近畿防空演習 9.29愛国機「滋賀号」命名式
昭和11（1936）	軍備改編　航空兵団第一飛行団に所属 8航空兵団司令部新設
昭和12（1937） 日中戦争	7飛行第一大隊〈偵察機二個中隊〉臨時航空兵団に編入編成 満州南部へ 9動員担任部隊となり飛行第七大隊〈偵察機二個中隊〉編成 第四飛行団所属として北支へ
昭和13（1938）	７飛行第三連隊材料廠が、 各務原航空支廠八日市陸軍航空分廠となる 8留守**飛行第三戦隊**に改編〈軽爆撃機三個中隊〉第一飛行集団所属
昭和14（1938） 第二次世界大戦	蛇溝町長谷野一帯を爆撃演習場にするため陸軍が買収
昭和15（1940）	飛行場拡張の為の立ち退き等始まる 4八日市陸軍航空分廠が大阪陸軍航空支廠の管下へ編入 8伏見憲兵分隊八日市分遣隊と改称
昭和16（1941） 大東亜戦争	第八航空教育隊が中部第九八部隊として転営 2八日市陸軍病院設置 4.1飛行場祭り（最後）　九七式軽爆撃機二十数機 8大阪陸軍航空廠八日市分廠となる
昭和17（1942）	3中部九三部隊　八戸へ移駐 3一〇四教育飛行連隊が中部第九四部隊として編成 〈爆撃機三個中隊〉第一飛行師団第一〇二教育飛行団に所属
昭和19（1944） 東南海地震	中部第九四部隊（第四教育飛行連隊）が埼玉県児玉へ転出、 明野飛行学校分教場となる 4･5旧八日市町、旧建部村、旧中野村大字中野・今崎墓地移転 春から夏、布引丘陵の掩体壕造成か 秋　八日市防衛隊が設置 11.マニラへ輸送作戦　12八日市臨時防空戦闘隊編成
昭和20　（1945）	５掩体壕工事「航空総軍第一三特別作業隊」 ５下旬八風街道筋の松林に飛行機を隠す土手を作る ５八日市近隣の国民学校に対し木製偽装飛行機を作るよう軍依頼 6大津地区憲兵隊八日市憲兵分隊に改称 7.24･25八日市空襲（24、20:00ごろ布引丘陵に飛行機を運ぶ） 第二三七飛行場大隊、独立機関砲第五六中隊、第二五四飛行大隊編成、 第一七七独立整備隊移駐
昭和20　終戦時	第八航空教育隊、飛行第二四四戦隊（戦闘機）などが駐屯 復員　254→8.30、237・177→8.31、教育隊→9.5、56→9.12、分廠11月 米軍の来町、引渡し日10. 13前後

布引丘陵 布引掩体群遠望

★布引掩体群へは…



アクセス：
・近江鉄道「大学前」駅下車　自転車・歩行者専用路の入口まで徒歩 20 分程度

東近江市の遺跡シリーズ 19

「布引掩体群」

編集・発行

東近江市教育委員会

埋蔵文化財センター

〒521-1225

東近江市山路町 2225

TEL:0748-42-5011

IP:050-5801-5011

FAX:0748-42-5816

[平成 29 年3月発行]

このパンフレットは、国庫補助事業「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」を得て作成しました。

発掘現場から 文化力 POWER OF CULTURE